

第4回 幼保小合同研修会だより

日 時 : 令和8年9月17日(木) 15時～16時40分

場 所 : ニコニコこども館5階ふれあい学校(オンライン研修)

教育講演

「一人一人の子どもの育ちを支える

架け橋期の実現」

松井 剛太 氏



講師紹介 香川大学 教育学部 准教授

専門は幼児教育・保育学、特別支援教育です。インクルーシブ保育や子どもの視点を大切にしたい保育評価、発達に配慮を必要とする子どもの支援、幼児期から小学校への接続(架け橋期)の教育について研究しておられます。保育者・教育者への研修や実践研究にも幅広く携わり、一人一人の子どもの育ちを支える保育・教育の実現に向けた研究・実践に取り組んでおられます。

今回の合同研修会では、まず「子どもの授業に取り組んでいる姿をどのように捉えるか」についてチャットを活用しながら参加者それぞれの思いや考えを出し合いました。子どもの姿を捉える視点について、改めて考える機会となりました。その後「架け橋期」の取り組みの具体例をお聞きし、幼児期から小学校への学びをどのようにつないでいくのか、その方向性について学びました。架け橋期の考え方には、大きく「適応論」「学び論」「子ども論」という視点があることを教えていただきました。「適応論」は、子どもが小学校の生活に慣れていくための取り組みです。一方、「学び論」では幼児期の遊びを充実させることが、その後の小学校での学びにつながっていくという考え方です。また「子ども論」では、子どもの声を聴き、一人一人の思いや学び方を大切にしながら、環境や関わり方を工夫していくことを学びました。さらにカリキュラムについては、最初から一律に目標を設定するのではなく、子どもの興味や関心、実際の姿を捉えながら、環境構成や必要な配慮を考えていくことが大切だと学びました。また、「一斉に同じことをする」という形についても、子どもの実態にあわせて工夫していく必要があることを知りました。

今回の研修を通して、幼児期に一人一人の遊びを充実させることが、子ども自身の「やってみたい」「知りたい」という気持ちを育み、小学校での学びへとつながっていくことを改めて学びました。

これからも、子ども一人一人の声や姿を丁寧に捉えながら、子どもが主体的に遊び、学ぶことのできる環境を大切にしていきたいと思います。

アンケートより

＊「その子を見ているようで、実は小学校のスタイルをレンズに入れている可能性がある」「架け橋期の準備で一番大切なのは、幼保での遊びを充実させること」などの言葉を受けて、自分の保育やかかわり方を振り返る良い機会になりました。

＊架け橋期の2つの方向性について、適応論を優先的に考えていましたが、一人一人の違いに配慮していかなければ、支援が必要な子どもほど過敏になり、困り感が大きくなることが考えられる。学び論を生かしたアプローチ・スタートカリキュラムの実践が必要だと感じました。

＊幼保小で連携となると、小学校側としては適応論を重視してしまいがちになると感じました。小学校の悩みを伝えつつも、幼保での遊びから学び、小学校に生かしていくという考えを大事にしていきたいです。